

目次:

● “指定”NPOになる見通しです!	1
● 特別寄稿: 2012年世界マスターズレガッタ参戦記 (池田照樹)	1
● 全日本マスターズ2013 (石井勝美)	1
● 2013漕艇めぐり (三原邦夫)	2
● エイト艇命名とオール購入ご報告 (事務局長、立花栄治)	2
● 会員紹介 — 今井義明さん	3
● 会員紹介 — 村木啓治さん	3
● 和菓子作りの魅力 (山口輝雄)	6
● ルーマニア、ドナウ遠漕 (新沼順子)	7
● ボート関連の映画 (三原邦夫)	7
● 2013年度の年会費納入状況 (会計担当理事、村上寛治)	8

全日本マスターズ2013 (石井勝美)

(本稿筆者の石井さんは当クラブ会員ではないが、クラブが一革会として宮ヶ瀬湖で実施している「土曜漕ぐ会」の常連なので寄稿して頂いた。) (編集局)

昨年(2012)の3月～5月、全日本マスターズレガッタ2012に参加するエイトの練習が行われていて宮ヶ瀬湖の静かな湖面によく通る<コックス>児玉さんの声が響いていました。

その傍らで『あれだけ練習したら上達するだろうな!』と羨ましく思いつつクオドを漕いでいました。

「今の自分では足手まといになるだけ」と思う一方で、「来年は絶対に手を上げよう」と筋トレやフォームの改善に努めました。

筋トレはそれなりに効果が分かるのですが、フィニッシュ時のブレードの舞い上がり、ハンズアウェイから上体のフォワードバンドの遅れ、キャッチ直前の上体の突っ込み等、容易に改善できませんでした。

三原さん、高山さんのローイングをよく観察しました。平日の水曜練習で高山さんからブレードは自然にフェザーするから・・・と実地指導を受けた時「目から鱗」でした。「招き猫の手」もそうでした。

レート22くらいまでは何とかできましたが集中力が途切れると以前の状態にもどってしまいま

(次ページに続く)

“指定”NPOになる見通しです! (事務局)



神奈川県は、全国の都道府県に先駆けて、平成24年2月から県指定のNPO法人への寄附金に係る個人県民税を控除する制度(県指定NPO法人制度)の運用を始めました。当NPOも指定を受けるべく申請し、7月22日、県審査会から指定相当の答申を受けました。答申は県議会に諮られ、年度内に指定が受けられる運びです。

指定されるメリットは上述のように税制上の優遇措置を受けられることにありますが、別に“指定”NPOとして社会からの認知度や信用が高まることが期待されます。 **

2012年世界マスターズレガッタ参戦記(後編)
池田 照樹

(春号からの連載記事です。前編の日本出発の様子からエイトとフォアのレースの様子は春号をご覧ください。)

1) シングルスカル Fカテゴリ 準備

シングルスカルのレース出場者はとにかく多い。自分の年齢カテゴリーより若いカテゴリーにも出場出来るという全日本マスターズにはないルール(のせいかもしれないが、半分くらいの人達は本当にボートを楽しむためにシングルスカルを漕いでいると感じる。そのこともあり、速い人も遅い人もいる。僕が出場したFカテゴリ(60歳～64歳)は10組のレースがあったので約80人がエントリーしていたことになる。エイト種目はほとんど歯が立たないが、シングルスカルやダブルスカルなど小艇は少し努力すれば中くらいにはいける。日本の選手もスカル系をもっと楽しめばよいのと思う。

借艇はエイトもそうだったが、ピカピカの新艇で軽く、ひと漕ぎですーと進む。これもロンドンオリンピックで使ったやつだと言っていた。いつも相模湖の重い練習艇を使っているので少々面食らった。バランスにも敏感で左右のキャッチとフィニッシュを適当にやっているとすぐどちらかに傾く。気になったのはオールの長さである。全長が305.5cmと長かった。日本のマスターズ標準は全長285cm、インボード長85.5cmである。インボードはマスターズ標準とほぼ同じで、手元のオーバーラップもこれまで練習してきたリギングと同じだが、アウトボード長が20センチくらい長い。そのまま漕いでみたが、大きな違和感がなかったので無調整で使った。艇が軽いので、オールの負荷をあまり感じなかったのかも知れない。自分の技量以外は文句なし。

2) レース

土曜日の夕方、F8+のレースが終わり、皆さんはビール(無料)で乾杯しているのを横目で見ながらそそくさとF1Xのレースへ。我々のグループでは僕が最後であった。ビール券はコックス預かりとなった。

シングルスカルのレースは参加者が多いので混み合う。7艇から8艇が3分間隔でスタートするのでどンドン行かない

(P. 5 に続く)

全日本マスターズレガッタ2013 (前ページから続き)

す。

そんな時 弓場さんから 全日本マスターズレガッタ2013の参加者募集のメールが配信され「弓場さんはきっと戸惑うだろうな」と思いつつ、まだかなり不安はありましたがエイトに手を挙げました。

<コックス>児玉さんの下、練習が始まると案の定バランスは取れず、ハイレートにはついて行けず、かなり落ち込みました。3~4回目の練習から徐々に慣れ 少しずつ周囲が見えるようになり 何とかなるかなと思える様になりました。

しかしながら コンスタント・レートは私に合わせて28と決まり、せめて30と思っていた私は諸兄に申し訳な

く、いたたまれない思いがしました。

児玉さんの「最後までレートを落とさず1本1本しっかり漕げば そこそこ行けるよ」に望みを託しました。

愛知池は 1000mコースが目一杯のこぢんまりとした池でした。

レースはカテゴリG(65~69歳)の5艇レースで、スタートから約450m地点では4番手でした。

その時 3番手の艇とは半艇身くらいのオーバーラップでした。「これは行けるかも」とレートを保ちつつ漕いでいるうち、750mくらいの地点で3番手に上がりました。ゴールは1着の艇に3秒56、2着の艇に1秒35差の3着でした。

多くの人の関わりの中で 素人が

「全日本」を冠したレースに出場でき、しかも2着に僅差の3着で無事終えることができました。引っ張って行って下さった諸兄に感謝するばかりです。

来年は 優勝するぞ!!

**



600m付近。優勝した団塊号と接戦の宮ヶ瀬湖クルー

2013漕艇場めぐり — 富山県「桂湖」と「神通川(県漕艇場)」

(三原邦夫)

何回か桂湖を訪問したことがある高山修さんが幹事役で、今年は2泊3日で富山県に行った。岐阜県との県境に近い山奥の桂湖。電源開発事業交付金でたんまり資金が交付されたらしく、高価なエンパツハ艇がぞろりと揃えてあった。湖自体は、我々宮ヶ瀬湖ボートクラブの本拠地である宮ヶ瀬湖と似た雰囲気だ。帰ってから最初の土曜漕ぐ会で、改めて「宮ヶ瀬湖はよいところだね」と艇上の一同同意。ただし、桂湖にはヤマメだか、イワナだか分からないが、大きい魚がボートの下をゆうゆうと泳いでいたが、これは宮ヶ瀬湖では見られない。

宿泊は合掌造り集落で名高い、という岐阜県白川郷を思い浮かべる人が多いかもしれないが、そうではなくて、富山県南砺市の五箇山。その合掌造り民家が民宿になっている。本文の題こそ漕艇場めぐりだが、以下は漕艇場めぐり一行が見聞したこの地方の郷土芸能に触れる。民宿からほぼ道路の向かい側に「こきりこ館」があった。ちよっ

(P.4に続く)



事務局長よりご報告

エイト更新艇「宮ヶ瀬」と命名

本誌春号でお伝えしましたとおり、2月16日に戸田からはるばる宮ヶ瀬湖に搬送されてきたエンパツハ製エイト艇は、駿台艇友会から無償譲渡されたものです。破損箇所がありましたが、相模湖漕艇場職員谷口亮氏の専門的技術による完璧な修理で美事に復元しました。他のエイト艇とくらべ長さも若干長く重量感溢れる艇です。日頃はクオドルブルでの漫漕中心の活動ですが、早速全日本マスターズのエイト出場クルーを編成し、練習艇として活用しました。まずまずの乗り心地でバランスもとりやすく満足しています。

さて名前をどうするかとアンケートで募集したところ、山紫水明の地に浮かぶ艇としてふさわしい名が次々と寄せられました。「明水」、「あやなみ」、「早戸号」、「一艇一心」、「かえで」、「つつじ」・・・。4月27日の臨時運営委員会で合議により、ずばり「宮ヶ瀬」と決定。5月8日に、艇本体に命名ステッカーを貼りました。それだけでも新艇のように輝いて見え、嬉しくなります。行事・大会だけでなく平常漕ぐ会でも大いに活用しようとメンバーの意気が上がっています。

当クラブ所有のエイト艇4艇のうち、もう1艇「摩利支天」(桑野造船製)も更新したいと考えていますので、情報があればお寄せください。

オール購入

当クラブ所有のスカルオールは、これまで4組だけでした。長良川で開催された世界選手権レガッタ出場のフランス・女子クルーが置いていったものを購入したものです。ブレードがフランス国旗の三色旗であることから、フランスオールと呼んで愛用しています。

日頃の活動がクオドルブル中心ですので、オールを新たに購入したいと願っていたところ、鶴見川漕艇場の岡井久雄氏から耳寄りな話が寄せられました。明治安田生命ボート部がスカルオールとスイープオールを放出するというので、スカルオール4セットとスイープオール各サイド一本ずつを購入することにしました。6月5日に、岡井さんに自家用車で宮ヶ瀬湖まで運び込んで戴きました。コンセプトの新品同様のオールです。そのうちミツパツツジをあらわす我がクラブカラーに塗り替えないとはいけません。大切に活用したいものです。 **

会員紹介

宮ヶ瀬湖ボートクラブは多士済々。活動もボートばかりではない。会員同士がよりよく知り合えるよう、新会員、現会員を問わず、自己紹介を兼ねた記事を書いて頂きました。今回は今井義明さんと村木啓治さんを紹介します。お楽しみ下さい。(編集局)

今井義明さん — 「初めてのヒマラヤ」

はじめにボートの会報に山の記事を書くことに場違いを感じましたが編集者のお許しを頂き記しました

私が1953年(12歳)のころ、世間ではエベレスト登頂、マナスル遠征開始、1956年マナスル登頂と空前の山ブームで、叔父がマナスル遠征に関係しており子供心に山に関する話が聞こえて高校入学と同時に山岳部に入部し、つらくも楽しい3年間をすごしました。

2006年、47年ぶりに山仲間と連絡がとれ、再度付き合い始めました。よく言われる「同じ釜の飯をくった」同士は47年間のブランクも無く打ちとけ、以後年2、3回山行を重ねました。

そうこうする内、ネパールヒマラヤトレッキングの話が持ち上がり、実現しました。

主催はヒマラヤ観光開発(株)で、コースはエベレスト山系のルクラからカラパタールを目指すエベレスト街道と呼ばれるコースとポカラからアンナプルナBCを目指すコースがあるが、今回は感銘を受けた「処女峰アンナプルナー最初の8000峰登頂」(エルゾグ著)のアンナプルナを実際見に行くことにしました。アンナプルナBCは4130mで富士山より400m高いだけで我々の体力には合っています。

全期間は平成22年10月9日～10月24日の16日間、そのうちトレッキン

グは8日間。

メンバーは6人で、76歳から62歳の高齢チームです

出発地ポカラの標高は820mで、終点アンナプルナBCでは4130m。標高差3200mになる。全工程小屋泊まりで、下山はチャーターしたヘリに搭乗して一気に下界に降ります。

出発まで何回か集まり細部の打ち合わせをし、荷物を梱包しいよいよ出発のときをむかえました。

10月10日、カトマンズでトレッキングリーダー{アンチェリン氏}の出迎えを受け、マイクロバスで移動。宿泊は湖に囲まれた島の中にあるホテルで、素晴らしい環境です。トレッキングに備えてシャワー、食事の後、早めに就寝する。

翌朝、ホテルよりマイクロバスでナヤプルにむかう。道路は舗装もがたがたの所、スピードを出すのでスリル満点で気が疲れる。現地で、同行してくれるシェルパ、ポーター、コックさん総勢11名と合流。いよいよトレッキング開始。

8日間の荷物シュラフ他はポーターが担いでくれ、我々は20Lのザックに手荷物(カメラ水筒雨具等)を入れ担ぎます。なんだか申し訳ない感じだ。

道中は石畳の階段、坂道がほとんどで地元住民の生活道路なので、ロバ優先で歩いて行きました。



12日、シャウリバザールよりガンドルン(1940m)。相変わらず石畳の道で飽きてきました。

13日、ガンドルンよりキムロン(1780m)。石畳の道ですが住民が良くぞ長い道中敷き詰めたと歩きながら感心しました。今日はアップダウンがきつく少々バテる。

14日、キムロンよりチョムロン(2170m)。出だし一気に220mの急登はきつい一言。

トレッキング中の1日のスケジュールは、朝目覚めるとティーが出て、その後洗面用の水を用意され歯磨き等々おこなう。朝食。荷造り。出発。昼ロッジに到着 先回りしたコックさん他が食事の用意(昼食・夜食共)。就寝9時。朝食7:30。私たちにすれば大名旅行です。

15日、チョムロンよりバンブー

(次ページに続く)

村木啓治さん

生まれは岡山の総社市で、昭和23年10月15日が誕生日の当年64歳です(いわゆる団塊の世代)。

親父の仕事の関係で東京/富山/金沢/仙台/大阪に移り住み、大阪で大学(大阪府立大学)を卒業、富士ゼロックスに入社し、神奈川県足柄上郡大井町(最寄駅は昔の東海道線の本線であった御殿場線の上大井駅)に定住しました。

ボートは大学時代に初めてこぎ始め(身長があるという理由で入学式の時、半強制的に勧誘されたのが始まりです)たのですが、卒業後はOB会出席以外はボートとは全く縁を切っていました。

定年(60歳)/再雇用(64歳)を経て

完全年金生活に入る段階で、何かやれることを見つけたい、体力的にいいことをやりたい(ちなみに大学卒業時には58kgであった体重が64歳の再雇用終了時には85kgまで増加)しかも継続してできることということで知人から勧められた畑仕事とボートを去年の9月頃からやり始めました。

現在は週3回のボート練習(団塊号(鶴見):1.5回、宮ヶ瀬湖BC(宮ヶ瀬湖):1.5回)、週2回の畑仕事、週2回の休養の計画で動いており、体調的にも精神的にも充実した日々を送っています(ちなみに体重は去年の再雇用時の85kgから現在はほぼ76kgとなり安定推移しています)。

まだ半年の参加経験なので年間を

を通じての宮ヶ瀬の自然(特に冬場)を知っているわけではないですが乗艇練習以外でのメンバーの暖かさ、昼食での話の面白さ、春から夏にかけての宮ヶ瀬湖の景色、渇水期の船の上げ下げ(船着き場まで持っていく船の重たいこと)、沈体験での水に入った時の気持ちよさなど宮ヶ瀬湖BCとしての楽しみを十分満喫しております。

今後メンバーと一緒にボートをこぐ、宮ヶ瀬湖の秋冬の風景を満喫する、その他いろいろな新しい体験を持つことを楽しみにして長く続けていきたいと思っていますので、よろしくお祈りします。

**

今井義明さん — 「初めてのヒマラヤ」 (前ページから続き)

(2310m)。

オーストリア、フランス、日本グループと会う。夜イギリス人家族(両親、大学生、高校生の娘)がきていた。国際色豊か。挨拶は「ナマステ」で通じるのでありがたい

16日、バンブーよりデウラリ(3230m)。今日はいよいよ3000mを越えるので元気が出る。

待望のマチャブチャレ(6993m)が顔を出す。ポカラから遥かかなたに見えていた山が目前にみえるので感激です。マチャブチャレは7000mには届きませんが世界の名峰だそうです。未だ未踏峰。



17日、デウラリよりマチャブチャレBC(3700m)。前日迄はモディコラ

(川)沿いを歩くので視界が悪く少々いやになりましたが、今日は森林限界を超え見通しもよくヒマラヤトレッキングをしている感じがしてきました。東にはマチャブチャレ、正面は6000m級の山を、西には終点アンナプルナ南峰を望む。高度順化のため3840mまで往復。明日に備える。

18日、マチャブチャレBCよりアンナプルナ内院(4130m)。最終日 6:10 出発。足取りも軽く、台地上を緩やかに上りながら内院に9:20到着。振り返るとマチャブチャレが正面に見え、正面にはアンナプルナサウス(7219m)が見えますが、主峰のアンナプルナは雲がかかり全体を見ることはできませんでした。しかし、昔読んだ「処女峰アンナプルナ」を實際雲の間からも眺めることができ嬉しくなりました。

19日、アンナプルナBCに滞在し、200mほど急な草つき斜面を登り氷河を目の前にして奥のほうから轟音が響き、不気味な雰囲気でした。

20日、早朝ヘリコプターが轟音と共に飛来し、我々一行は宿泊客が目する中ヘリに乗りこみました。5m浮上した直後すぐ脇にある谷に飛び



込む曲芸飛行で、ジェットコースターの比ではない恐怖心を与えられたが無事ポカラに到着しました。

当初からヘリでの下山は決まっていたのですが、8日間かけた登った距離をわずかの時間で降下してしまい、なんとなく複雑な心境になりました。

今回16日間のトレッキング中、体調を崩した人もいましたが、支援していただいた人々のお陰で全員無事に帰国できほっとしています。

2013漕艇場めぐり — 富山県「桂湖」と「神通川(県漕艇場)」(P.2から続き)

とした演芸館だ。「こきりこ」とは郷土芸能で使う七寸五分の二本の煤竹で、これを打ち鳴らす。宿泊した晩、この「こきりこ館」で全国高校総合文化祭郷土芸能の部に出場する南砺平高校郷土芸能部の壮行会が催された。ちょうど夕食を食べ終わった頃、宿の主人からこれを知らされ、一同ぞろぞろと出かけた。もっとも知らされたとき、何か民謡大会があるらしいとしか思わず、たいして期待もしなかったのだが、驚きの心得違い。南砺平高校は郷土芸能に関しては「名門」なのだ。後で知ったことだが、過去、全国大会で何回となく優秀な成績を収めている。今回、全校生徒80数名のうち、45名が地方(「おはやし」の意味)と踊り手になって出演している。その晩の演目は本番と同じかどうかは定かではないが、20分間にわたる男子、女子の高校生の熱演だった。終わった後、生徒全員整列し、来賓の挨拶のときにはきちんと来賓の方に正対し、あくまでも折り目正しい。顧問の先生から促されて生徒全員がそれぞれに全国大会に向け

た一口コメントを述べた。演技が素晴らしい、衣装が素晴らしい、振る舞いが素晴らしい、とボートの一行感服しきり。

こうして今年の漕艇場めぐりは望外の収穫があった。

高山幹事さんに感謝! **

漕艇場めぐり参加者で、写真愛好家の清水賢介さんが壮行会当日に撮影した写真



清水さんが数点の写真を南砺平高校郷土芸能部に送ってあげたところ、絵葉書によるお礼状が届きました! 下に掲載させていただきます。(編集局)



名前は、写真を送っていただいたありがとうございます。ご褒美として、全国大会では、優良賞で優秀賞に選ばれ、8月下旬の東京から、国立劇場に行けず残念です。来年は、砺波県で大会があり、ぜひ、よろしくおねがいします。

学校の絵葉書に印刷されている写真

特別寄稿 2012年世界マスターズレガッタ参戦記(後編)

(P.1 から続き)

池田照樹

とおいて行かれる。僕のバウナンバー(レーンプレート)は「K7」。レース番号Kの7レーンという意味である。H, I, J, のバウナンバーの連中が自分の前にいる。後ろにいたら、先に行くように場所を譲ってあげる。これはレース前の回漕レーンでも同様である。練習レーンは2000mコースの500mまで、スタート位置(2000mコースの1000m位置)の500m手前から20m間隔くらいで一列になって出番を待つ。早く行こうとすると「後ろに下がれ」と言われる。日本のようにステッキボートであればその間隔が広いのでなんとでもなるのだが、スタートデッキとデッキの横の間隔はシングルスカルがやっと通れるくらい。子供達が艇のスターンをつかむためのスタートデッキはエイトではさがり、シングルスカルではスタート位置に近づく。日本ではロープで調整するが、ここではワイヤーを巻き取ったり、緩めたりして調整していた。シュースタートシステムのハコの中にトップボールを入れるのも難なくできた。

僕の相手はK8(左)がGBR(61歳)、右がK6(GER)63歳、K5(GER)63歳、他に3人の7艇でのレース。K8を除いてみんな63歳である。ユニフォームの格好は速そうに見える。

レースもエイトを入れて3回目なのでわりと落ち着いていた。少々疲れ気味と言った方がよいかも知れない。「Boat Dankai Igeda」とちゃんと呼んでくれた。例の落ち着いた調子で「アテンション」、青信号が点灯すると同時に「ブー」。スタートでは左と右2杯とはほぼ同じ出だしだった。この頃はスタートが恐く、オールを水に取られないようにするのが精一杯。1本目、2本目は強く引けなかった。走り出したら少し安定してくるのでそれまではガマン。それでもスピードコーチでレートを見ると最初の5本が38, その後35, 34と結構高い。十数本で徐々にレンジを長くしながらコンスタント(SR33)に移った。250mを過ぎ、500mでも左右の4人は並んでいた。僕は特にどの辺をねらうという目標もなかったので淡々と漕いでいた。GPSでは時速14km台を推移していたので練習より遅いくらい。レートは32くらいでいつでも上げられる程度のパワー。K8の爺さんはちらちらと良くこちら見る。左端なので左は見る必要がないからだと思うが、そんなに気

にしないでいいのにと思いながら、こちらは引き離すチャンスをねらっていた。右側のレーンで大きく遅れている艇があり、ビリにはならないことがわかった。右となりの2杯(ドイツ)は半



艇身ほど遅れている。トップは(後ろの)視界から消えていた。スタンドの前にさしかかった。750mくらいか。日本人の大きな声援が聞こえた。800mあたりからK8の英国爺さんを追い越す準備にかかった。34にレートアップ。レートは上がってきたが、レーンの中央からどんどん右へ。とうとうオールの背中でブイをたたいてしまった。次に右(ストロークサイド)のオールがブイの下にもぐり抜けにくくなるのが2本ほど有り、そのたびに左側オールが舞い上がり減速。僕のdistance/strokeがブイの間隔と同期していたとは。K8はスーと出て、K5、K6もせまってきた。あーあと思いつつ、気持ちをリセットして漕ぎなおしたが、数本でゴール。ゴールしたら電光掲示板で自動的にすぐ表示され、オリンピック選手気分。

着順	LN	国	500m	1000m
1	3	オーストリア	01:56.52	03:58.35
2	2	ポーランド	02:00.21	04:10.52
3	8	イギリス	02:03.79	04:10.97
4	7	日本(池田)	02:04.72	04:14.74
5	6	ドイツ	02:04.81	04:15.54
6	5	ドイツ	02:05.59	04:18.04
7	4	ブラジル	02:27.36	04:53.74

K8にやられた。結局7杯中の4位と真ん中。最後に色気を出さないのでそのまま大きく漕いでおれば...と考えないでもなかったが、初めての世界マスターズ挑戦であり、またシングルスカルを始めて2年半と言うことを考えれば満足出来る結果であった。少し自信もついた。

3) 世界マスターズにおける日本人クルーの実力

E, F, Gカテゴリーにおけるエイト及び小艇の全レースの決勝タイムのヒストグラムをとってみた。エイトやクオドルプルなどでは遅いところは日本人クルーが占めている。

シングルスカルやダブルスカルなどの小艇は大きくばらついている。速い人もおれば遅い人もいると言うこと。僕の結果(F1X:4分14秒74)は中央付近。僕がGカテゴリーまでこのタイムを維持すれば上位1/3くらいになる。しかしながら速い人はいつまでも速く、4分を切らないと優勝はできない。無理かな。80歳くらいまで漕げれば何とかなるかも知れない。

4) 食事と観光

海外ではなんと言ってもその地方独特の料理や飲み物を楽しむこと。ドイツではそれほど期待していなかったがソーセージはいろんな種類があり、すべておいしかった。もちろんおみやげにも買って来た。魚系はオランダよりおいしい。特にレース場近く、ランチタイムに出ている屋台で購入したイワシとサーモンのサンドイッチはアンチョビ風の味がして最高だった。発酵させた味でやはり人気があった。ドイツ人にも舌が肥えた人もいるもんだと見直した。

バイキングスタイルの朝食

ホテルは朝食付なのでたらふく食べられる。何種類ものソーセージがあり、迷ってしまうほど。朝からカステラみたいな甘いものをたくさん食べる人が、僕は遠慮した。炭水化物、タンパク質、野菜をバランス良く食べるのもレース準備の一つ。

モンゴル料理

欧米で3, 4日と過ごす洋風の食事に飽きてくる。アミノ酸バランスだと思うが、日本人には味噌味、醤油味などが長い間は体に入らないと(ちょっと大げさだが)支障を来す。僕は海外旅行では必ずインスタントみそ汁の素や醤油を持参する。今回も持参していたが、できるだけ現地の食事を楽しむつもりで、まだ使っていなかった。そろそろ限界かと思っていたところ。夕食場所を探して運河の近くを散歩していたとき「モンゴル料理店」が目につき、僕がしきりに勧めた。入り口に竹笹の飾りもあり風情を感じさせた。それに醤油を焼くにおいてガマン出来なくなっていた。ちょっ

特別寄稿 2012年世界マスターズレガッタ参戦記（後編）

（前ページから続き）

（池田照樹）

と見学したところ、ジンギスカンスタイルの肉料理で、いろんな動物（ウサギ、牛、豚、鶏、カンガルー等々、エビ、貝や魚も）の肉をピックアップし、それを鉄板焼きで料理してご飯の上に乗せてくれる。お客が食べているのを観察すると見るからにおいしそう。入ったが、結果は散々。肉は硬いし、僕の注文が他の人が頼んだものが入れ替わっていた。

すべてのレースが終わった土曜日の夜は同行した奥さん達も入って打ち上げ。少し奮発しておいしいワインを飲みながらのイタリア料理はやはりおいしかった。

観光—ケルン大聖堂

練習の合間に各地の観光に行く



ヴァレーゼはミラノの北55キロにある人口8万人の街。ヴァレーゼ湖と山々に囲まれた風光明媚なこの地はミラノの貴族たちの避暑地だったとか。（編集局）

た。木曜日は午後からレースが始まるため、午前中のみ練習。午後は列車に乗ってケルン大聖堂に行った。日本のお城や寺院も外国人が見ると驚くのだろうけど、ケルン大聖堂はすばらしかった。デュイスブルグからケルンに行くときの列車の切符は自動販売機で購入した。これも旅の面白さだ。しかしながら（池田を含む）グループで買うと一人で買った人より高くなるという現象に驚いた。なぜかわからず、そのまま乗車。しかし、帰りに指定席を購入したときは同額になった。どうも往きの切符購入では急行運賃を入れないで購入してみたみたいだ。早い話く言えば、不正乗車？あちらでは改札がないため長くそのこと

が判らなかつた。ドイツ語のわかる人達が「俺にまかせろ」と言っていたので、こちらは「ハイハイお願いします」と金だけ渡したので罪には問われな

いかな？ 今回のドイツ世界マスターズはレースだけでなく観光も食事も大いにエンジョイした。日頃の練習の苦勞もほとんど吹き飛んだ。次への目標もできた。

5) 次の目標

この「風のたより」秋号が発行される時期にはWorld Masters 2013でイタリアのヴァレーゼに行っている。また楽しんでいきます。

**

和菓子作りの魅力

（山口輝雄）

10年前会社を定年退職。これから自分の時間。何にでも挑戦してみようをモットウにいろんなことをやってみた。

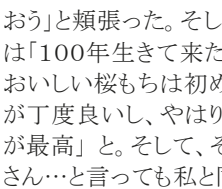
ボートは世界マスターズに12回挑戦、ゴルフ、スキー、料理、家庭菜園、造園、ベートウベン第九合唱団、海外（スペイン）長期滞在、と数えるときりがない。そしてそれぞれが半端ではない。我ながらいろいろと良くやっ

たもんだ。和菓子づくりもその一つ。今回はその和菓子作りについてお話ししてみたい。

渋谷に本店のある「ベターホーム」という料理教室に通いだして早や9年になる。年2教程ずつ受講して、和、洋、中、そしてめん打ち、パン作りコースを終え、5~6年もすると受けるコースが無くなってしまった。そこで和菓子作りに挑戦することとなった。洋菓子に比べ脂肪分がなくカロリーも低く身体に良さそうでもある。和菓子職人を目指しての悪戦苦闘が始まった。洋菓子を作る人は多いが和菓子を作る人は少ない、みなさんその意外性にビックリする。そのビックリする顔を見て、私はだんだんと鼻が高くなったようだ。

私の親戚に100歳を迎えるおばあちゃんがいた。3年前の春、上大岡のご自宅に100歳誕生日のお祝に参

上することとなった。丁度料理教室で「桜もち」を習ったばかり、慣れぬ手つきで10個ほど作り土産として持参。おばあちゃん「早速いただいたちゃ



おう」と頬張った。そしておっしゃるには「100年生きて来たけど、こんなにおいしい桜もちが初めて！！塩加減が丁度良いし、やはり作りたてで香りが最高」と。そして、そばにいたお嬢さん…と言っても私と同年代…、いわく「おばあちゃんは昔から桜もちが大好きでシーズンには毎日のように買ってきて食べてんの、だから桜もちについてはうるさいの」と。お世辞半分としても嬉しくて嬉しくて、和菓子づくりにのめり込むことと相成った次第である。

この春、我が親しい艇友の一人がガンで他界した。慶応病院に入院中お見舞いに行く機会に恵まれ、ちょっと小さな作りたての「桜もち」を土産に持参。

それを見るや否やニコっとして口の中に頬張り実には上手そうに食べた。そしていわく「桜もちが大好きなんです。毎年早慶レガッタの帰り、長命寺の桜もちを必ず買って帰って食べていました。ところが今年はこのザマで

諦めていたところですよ。ここで食べられるとは思っていませんでした」

涙ぐんだのでしょうか、顔をくしゃくしゃさせながらもぐもぐやっていました。

私も思わずもらい泣きでした。

その3~4日後に彼は帰らぬ人となった。和菓子を作ってたてて本当に良かったと思った。

まだまだ駆け出しで偉そうなことは言えないのだけど、和菓子には日本の四季がある、日本の文化がある、そして日本の芸術がある。

米で作る「いちご大福」「桜もち」「薯蕷饅頭（じょうよまんじゅう）」。「豆で作る「きみしぐれ」「練りきり」。小麦粉で作る「栗まんじゅう」「どら焼き」。寒天で作る「錦玉清流」。この辺りが私のレパートリーで、特に薯蕷饅頭、桜もちはそれぞれ500個以上は作っている。勿論、失敗は数知れず。しかし失敗して学ぶことも多い。

和菓子のおいしさは「あん」に尽きるという人もいます。確かに手作りの「あん」は香りが良い。しかし素人で「あん」から作る和菓子づくりは手間暇がかかり過ぎ、作るのが億劫になってしまう。私はあちこちで買い比べ、極上の「あん」を買い溜めしている。「あずき」には活性酸素を取り除くポリフェノールの含有が赤ワイン以上であるこ

（次ページに続く）

ルーマニア、ドナウデルタ遠漕

(新沼順子)

数年来の知人ライナーからのメールは、いつも突然飛び込んでくる。彼はドイツ人で、FISAローイングツアーにたびたび参加し、自身でもチャーチボートを所有し、毎年2週間ほどのボートツアーを企画する。彼が企画するツアーのメンバーの選出は主催者である彼が一人で決め、詳細を参加表明者に送る。

ここ数年、彼の夢は、古代ローマ人が征服した全長2、860キロのドナウ河を全制覇すること。今年はその航路の最後、ルーマニアドナウデルタ地方とセルビアである。招待文は魅力的。心誘われる風景写真がつけてあり、行くなら「今でしょ!」とばかりの文面。

ライナーの鉄則は、自分はツアーオペレーターではないので、集合場所までの道のりは各自で、ツアー中の危険は、参加者全員で責任を分かち合うこと。参加表明をしない限り、誰が参加するのかわからないが、個人主催であるので、ほとんどが知り合いというツアーになる。未知の土地、黒海に面した世界自然遺産の地。こんな機会は滅多にないかもしれないと、参加表明。

5月9日からの開催までに何通かのメールのやりとりがあり、5月6日にブカレストに向かった。ブカレストからドナウ河入口までの足は、あらかじめライナーが手配してくれていて、チャーターバス待ち合わせ場所で、友人たちとの再会のハグ、握手。今回、オーストラリア、ノルウェー、デンマーク、スペイン、フランス、ドイツ、スイス、オーストリア、そして日本から14名参加。

バスはどんどんと荒地に向かい、運転手は何回か道を間違える。5時間ほどのドライブ。着いたGalatiの船着き場で、古代ローマ人の衣装に身を包んだライナーの出迎え。月桂冠

をかぶり、長いステッキをたたきながら近づいてくる彼は古代人そのもの。

荷物をタグボートに乗せ、旅の終わりまでの宿となるフローティングホテル(船上ホテル)へと移動。ウェルカムディナーは、ドナウの魚が数種、スープ、そして、地元焼酎のパリンカ、ビール、ワイン。サプライズ好きのライナーからTシャツなどのプレゼント。

翌10日、いよいよ、ローイングの始まりだ。青いドナウ・・ではなかった。というより、泥色の巨大な川幅、行き交う貨物船はメガ級の大きさ。黒海から続く河なので、交通量が非常に多い。左手にウクライナをのぞみ、ひたすら漕ぐ。

初日40キロ。昼に漕ぎ、夜に又揺られながらの舟宿。ひたすら水との交



流が続く。漕艇2日目、黒海を漕ぐ。黒海はイスタンブールまで続いているという。ライナーはこのまま、イスタンブールへとジョークを飛ばす。

船上ホテルは2、3日ごとに移動し、チャーチボートはそこから、無数に散りばめられた湖、沼、運河へと毎日、30キロから60キロ移動する。大自然とはいえ、行けども、行けども生い茂る葦の間をぬけていくと陸が恋しくなる。ドナウデルタの85パーセントが湿地帯といわれるだけあって、陸にあがれるのは、ほんのちょっとの時間。トイレのための接岸も足が定まらないので、素通りすることが多く、今

回5時間トイレ休憩なしということもあった。女性群の悲鳴に「いったい、どこへ船をつけたらよいと言うんだ!」とライナーの容赦ない応答。30度を超す暑さの中、「あと、1時間漕げば、ペリカンの群れに会えるよ!」「もう少しで、睡蓮の群生だ!」「さあ、君たちをコウノトリが待っているよ!」とのえさにも、誰もだんだん飛びつかなくなり、頭をよぎるのは、ホテルでのビール。誰もが無口になってくる。

船長に頼んで手にいれた、水域地図はかなり昔のもので、入り組んだ運河の道のりをつかむのは難しい。全9日間で漕いだ距離410キロ。ひたすら漕ぎ、ひたすら飲み、ひたすら語り。船長の釣ってくる魚は、新鮮だが、味は大味。買い出しが出来ないので、徐々に野菜の量が減ってくる。ライナーがドイツから大量に運んできた、ワイン、ビールも底をつき、最終日はすべて空という状態。夜には、満天の星空。船の灯りとりに群がる蚊柱が天まで届く勢い。

オリンピックボート競技で、ルーマニアは数々の活躍をしているが、ボート練習をしている姿を目にすることはなく、黒海に面したさびれた港町Sulinaでボートクラブの看板を見ただけだった。

最終日、Tulcea近くで、ローイング終了。希望者がタグボートでMurighiolへ向かい観光。馬車にゆられ、ローマ人の残した遺跡、教会を見て回る。チャウセスクの独裁政権、野犬とホームレス、ドラキュラ伝説、郊外にはほとんど信号のない国ルーマニア。

今回ローマ人の征服ルートに思いを馳せることはなかったが、ライナーの限りない冒険心、情熱、実行力に敬意と感謝をささげる。

**

和菓子作りの魅力 (前ページから続き)

と。植物繊維が多いこと。そして、必須アミノ酸、ビタミンB群、鉄分、カリウム等が豊富であることも勉強した。

最近ではデパートに行くと必ず地下の和菓子屋さんを探し、しばしショーケースを眺め、その技に感心し季節を感じ、そして2個だけ買って帰る。昨日は銀座に出たついでに、銀座4丁目にある和菓子の老舗「あけぼの」

に立ち寄り、「うぐいすもち」を2個買って帰った。これも勉強である。

和菓子づくりは腹を満たすためではない、心を満たすために作るのだ…と何かに書いてあった。何んて奥が深いだろう。。

**



ローイング関連映画

(三原邦夫)

ローイング関連映画を紹介しようと思うが、一口にローイング関連映画といってもその範囲は微妙だ。ローイングを正面から取り上げた映画や、ちょっとだけボートが現れるものや、また、よく注意していないとボートが写っているのを見過ごしてしまうもの、など。

(次ページに続く)

2013年度の年会費納入状況と寄付金の御礼

会員の皆様には毎年の会費納入を誠にありがとうございます。

今年も、会員(正会員および賛助会員)総数92名(8月中旬現在)の内、今までに73名の方から年会費を納入して頂いております。

昨年度と比べて少々納入のペースが遅くなっておりませんが、年内には皆様からの納入を期待しております。会費納入を失念されていると思われる方には再度納付書を送らせて頂きますので、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

また、今年度も昨年度に引き続き年会費の納入と同時に寄付金を募り、右記の方々から今までに合計217,000円のご寄付を頂きました。

昨年度は最終的には250,000円のご寄付を頂きましたが、年度途中の経過状況をお知らせした「風のとより(2012年秋号)」発行以降にご寄付を受けた方々につきましても今回御礼を兼ねてそのご氏名を掲載申し上げます。

昨年度いただいた寄付金は駿台艇友会からのエイト中古艇の取得に充当し、また既存の老朽艇およびオール等の維持整備に活用させて頂きました。

今年度も同じように活用させて頂くこととしておりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

2012年9月～12月受領分

池田 孝至	今井 義明	鈴木 政憲
高原 茂雄	田ノ本 一彦	
2013年1月～8月受領分		
飯塚 憲治	佐野 幸子	豊田 収二
今田 智彦	柴原 和紀	鍋島 久夫
大久保 敏治	清水 賢介	新沼 邦恒
大島 勇次郎	杉原 恵子	新沼 順子
大隅 多一郎	杉山 徳義	登里 貞治
小口 喜美夫	鈴木 信太郎	橋本 俊之輔
鎌倉 篤子	須永 定博	氷見 昌樹
河口 道晴	清田 眞一	三原 邦夫
河原崎 義雄	高山 修	宮川 重
岸田 洋子	武安 正恒	村上 寛治
北澤 ちぐさ	立花 栄治	百瀬 道夫
工藤 忠	館 次郎	山口 厚子
栗原 啓子	田中 博三	山口 輝雄
最所 崇文	田ノ本 一彦	弓場 常正
斎藤 攻	坪井 教一	横山 忠雄
坂下 廉二郎	鶴野 省三	吉野 毅
坂田 孝一	寺下 聡	(敬称略、あいえお順)
佐藤 正雄	寺田 喜宣	

ローイング関連映画 (前ページから続き)

事務局長・立花栄治さんによると、ヘンリー・フォンダ主演の「荒野の決闘」にもボートが写っているとのこと。西部劇にボートが?立花さん曰く、「ドク・ホリデーが出てくる場面で、彼の部屋に写真が飾ってあり、その写真がエイトらしいのに気がついた。彼が東部名門大学のボート選手だったことをさりげなく示していた・・・」

ドク・ホリデー、本名 John Henry Holliday。その素性は、アメリカ開拓時代のガンマンにして、ギャングラー。1872年、ペンシルベニア歯科大学で歯科医師資格取得し、歯学博士の称号を持っていたため、「ドク」と呼ばれた。西部に移住し、そこで手取り早い収入源のギャンブルに目覚め、口論から殺人を犯し・・・と西部劇ファンのロマンチックな夢を砕くような経歴の持ち主。おっと、西部劇の話ではなかった、ボート、ボート。

ビートルズのコメディ映画「A Hard Day's Night」(1964) だったと思うが、背景場面の川面にシングル

スカルが登場し、それが転覆する場面があったことを記憶している。

最近の映画では「The Social Network」(2010)がある。今をときめくフェイスブックの創設者ザッカーバーグが主人公の映画だ。何がボート関連かというと、フェイスブックのアイデアは自分たちのものだとしてハーバード大学ボート部員の双子の兄弟が、フェイスブックの成功後、訴訟を起こしたのだ。これは本当。この双子の兄弟は2008年北京オリンピックに舵なしペアで出場している。訴訟がどうなったか、話が脇にそれるので省略。

最新作は2012年の「Backwards」。自身、ボート選手だった女性がプロデュースした映画だ。オリンピックを目指していた女性選手が夢破れて高校女子クルーのコーチに就任。だらしのない女子高生のダブルスカルを全米選

手権で優勝させるというフィクション。私は期待を持ってアメリカからDVDを取り寄せて見たが、映画は駄作だ。その後、NYタイムズに映画評が掲載された。曰く、「何もかも中途半端な映画・・・」これには私もまったく同意。

さて、真面目に「ボート関連映画」をリストアップしようとする大変な作業になってしまうことに気がついた。インターネットの世界は便利なもので、こんな情報はないかな?と思い、検索するとある、ある。自分がコツコツと作業するまでもない。ずるい話だが、そのサイトを紹介することでローイング関連映画を紹介したことにしよう。

<http://www.twrc.rowing.org.uk/movies/filmguide.htm>

これはイギリスのトイックナム(サッカークラブで有名なところ)のローイングクラブの誰かがまとめたものです。驚いたことに日本の「がんばっていきまっしょい」までリストされている。その英語題名は「Give It All」だ。

お問合せ

立花栄治(宮ヶ瀬湖ボートクラブ事務局長)宛 電話: 0462-88-2151 e-mail: ryoucha@fa3.so-net.ne.jp